

Dialectica et Neoaristotelismus ——Whiteheadの検討(3)——

赤井清晃

5. 「自然の法則」と神の問題

(承前)さて、「神」の問題を、『過程と実在』の記述に基づいて理解することに役立つ視点として、Whiteheadが、哲学史上の実例に言及している記述を挙げるができるであろう。それは、直接に、「神」に言及するのではなくて、宇宙や自然についての全体的な議論の中で、「自然の法則」と言われるものと、「神」との関係について言及している箇所である。いわゆる、Whiteheadの「形而上学三部作」の中では、最後に出版された『観念の冒険』(Adventures of Ideas, 1933)の中で、Whiteheadは、哲学史上、「自然の法則」が、いかなるものとして、把握されてきたのかという問題を取り上げている(第二部、第7章)。この問題は、宇宙観の問題であり、換言すれば、「自然の秩序」と「自然」そのものを、いかなるものとして把握するか、という問題であり、「古代および近代の宇宙論」と、その宇宙論を生み出すために用いられた様々な思索の方法や学的方法の問題である。ここで、Whiteheadは、それぞれの宇宙論を唱えた人々の、宇宙や自然についての「抱握」prehensionを、哲学史上の実例を挙げて説明しているのである。さて、実際に、Whiteheadが取り上げている「自然の法則」に関する説は、次の4つである。彼は、次のように述べている。

At the present time, there are prevalent four main doctrines concerning the Laws of Nature: the doctrine of Law as immanent, the doctrine of Law as imposed, and the doctrine of Law

as observed order of succession, in other words, Law as mere description, and lastly the later doctrine of Law as conventional interpretation. [A.N.Whitehead, *Adventures of Ideas*, p.111]

現在、一般に行きわたっている「自然の法則」に関しての四つのおもな説があります。すなわち、「法則」を内在するものとする説、「法則」を課せられたものとする説、「法則」を観察された継起の秩序だとする説、換言すれば、「法則」を単なる記述だとする説、と、最後に、「法則」を規約による解釈だとする比較的最近の説がそれです。[種山恭子訳『観念の冒険』, p.499]

これらの「自然の法則」に関する説の中で、「神」あるいは「絶対的存在者」との関係が比較的はつきりしているのは、第一の「内在説」と第二の「賦課説(課せられたものとする説)」である。すなわち、「内在説」によれば、

the order of nature expresses the characters of the real things which jointly compose the existence to be found in nature. [Whitehead, *Adventures of Ideas*, pp.111-112]

自然の秩序というものは、自然のうちに見いだされるもろもろの存在者を共同して構成しているところの現実の事物の性格を表現している。[種山恭子訳『観念の冒険』, p.499]

ということであるから、我々は、「自然」の中の事物の相互関係を知り、その相互関係における、パターンの同一性を「自然の法則」として理解することになる。換言すれば、その「法則」は、「自然」を構成している事物に行きわたっている性格の共通性を説明するものである、ということになる。そして、この説においては、その相互関係におけるパターンの同一性が「自

然の法則」であるところの事物は、同じ資格をもつものとみなされているので、何か他のものとは異なる特権的な存在者は想定されておらず、従って、この説は、「絶対的存在の否定」を含んでいることは明らかである、と言われる。つまり、この「内在説」では、仮に、「神」の名で呼ばれる何らかの存在者が語られるとしても、それは、世界・宇宙内の構成要素のひとつとしての「神」であって、この世界・宇宙とは別の「絶対的存在」「超越的存在」ではないということである。そのような例としては、『創世記』の世界創造における「神」ではなくて、Whitehead もしばしば言及しているように、プラトンの『ティマイオス』における、世界の制作者としてのデーミウルゴスを挙げる事ができるであろう。また、四つのおもな説と言われるもののうち、第三の「記述説」と、最後の「規約説」も、これらの中で、もし、仮に、「神」の名で呼ばれる何らかの存在者が語られるとしても、それは、この世界・宇宙とは別の「絶対的存在」ではない、という点で同じであると言うことができるであろう。従って、「神」との関係で、より注目すべきは、実は、第二の、「法則」を課せられたものとする説、すなわち、「賦課説」ということになる。

6. 「賦課説」の問題

では、「賦課説」とはどのようなものなのか。「法則」を課せられたものとする説は、次のように、説明されている。

The doctrine of Imposed Law adopts the alternative metaphysical doctrine of External Relations between the existences which are the ultimate constituents of nature. The character of each of these ultimate things is thus conceived as its own private qualification. Such an existent is understandable in complete disconnection from any other such existent: the ultimate truth is that it requires nothing but itself in order to exist. But in fact there is imposed on each such existent the necessity of entering into relationships with the other ultimate constituents of nature. These imposed behaviour patterns are the Laws of Nature. But you cannot discover the natures of the relata by any study of the Laws of their relations. Nor, conversely, can you discover the laws by inspection of the natures. [Whitehead, *Adventures of Ideas*, p.113]

「課せられた法則」の説は、さきの場合とは二者択一の関係にあるいま一つの形而上学説、すなわち、自然の究極的構成要素たる存在者間の「外的関係」を唱える形而上学説を採用しています。したがって、これら究極的な事物それぞれの性格は、その事物自身の固有の限定として考えられるのです。こうした存在者は、同様の他のどんな存在ともまったく切り離して(そのものだけで)理解されるのであって、根本的な真実においては、そうした存在者は、存在するのにそのもの自身以外何者をも要しないのです。しかし事実上、こうした存在者のおおのには、自然の他の究極的構成要素と関係を結ばなければならないという必然性が課せられています。これらの課せられた動きのパターンが「自然の法則」なのです。しかし、関係の「法則」をどのように研究しても、そのことによって関係項の本性を発見することはできません。また逆に、関係項の本性を調べることによって法則を発見することもできないわけです。[種山恭子訳『観念の冒険』, p.501]

存在するのにそのもの自身以外何者をも要しないと存在者間の関係、あるいは、それらの存在者どうしの「動き(ふるまい, behaviour)」のパターンが、「自然の法則」であるというとき、「自然の法則」は、はじめからあるものなのか、それとも、何かによって、外から、課せられたものなのか、という問題に対する答のひとつが、この「賦課説」であると言えるだろう。そうすると、「賦課説」は、容易に、ある種の「理神論(デイズム)」を示唆することになるであろうし、また、逆に、ある種の「理神論(デイズム)」という信念が先にあって、そこからの帰結として、「賦課説」が出てきたとも言えることになる。

The explanation of the doctrine of Imposition both suggests a certain type of Deism, and conversely it is the outcome of such a Deistic belief if already entertained. [Whitehead, *Adventures of Ideas*, p.113]

こうした「賦課」説の説明は、ある種の型の「理神論」を示唆しますが、逆にそれはまた、もしも「理神論」的な信念がすでに抱懐されていたとすれば、その信念の結果でもあります。[種山恭子訳『観念の冒険』, p.501]

この「理神論」の例として、Whitehead は、ニュートンやデカルトに言及しているのであるが、ニュートンの場合、『プリンキピア』に示されているような、美しいシステムとしての太

陽系の考えは、「自然の法則」を課する「神」を必要とすることを明らかにいうには、十分に究極的なものだと考えたとしている。

But he certainly thought that the conception of the solar system exhibited in his Principia was sufficiently ultimate to make obvious the necessity of a God imposing Law. Newton was certainly right to this extent, that the whole doctrine of Imposition is without interest apart from the correlative doctrine of a transcendent imposing Deity. [Whitehead, *Adventures of Ideas*, p.113]

しかし、彼（ニュートン）は確かに、その『プリンキピア』に示されているような太陽系の考えが、「法則」を課する一個の神の必要を明らかにしうるには十分に究極的なものだと考えたのです。ニュートンは確かに、「賦課」説全体が、それと相関するところの、法則を課する超越的な神の説を離れては重要ではないという、この範囲まででは正しかったのでした。[種山恭子訳『観念の冒険』, p.502]

Whitehead が指摘するニュートンの『プリンキピア』については、具体的な箇所が示されておらず、種山訳は、その「一般的註」を指示しているけれども、このことは、『光学』第 III 篇の最後の「疑問」にも見ることができるであろう。それを、順を追って、やや具体的に見てゆくと、まず、「神」による世界の創造についての言及があり、最初に「神」が物質をいかなるものとして創造したのか、すなわち、「固い、充実した、密な、堅い、不可入性の、可動の粒子」として創造したことが語られる。

All these things being consider'd, it seems probable to me, that God in the beginning form'd Matter in solid, massy, hard, impenetrable, moveable Particles, of such Sizes and Figures, and with such other Properties, and in such Proportion to Space, as most conduced to the End for which he form'd them; and that these primitive Particles being Solids, are incomparably harder than any porous Bodies compounded of them; even so very hard, as never to wear or break in pieces; no ordinary Power being able to divide what God himself made one in the first Creation. While the Particles continue entire, they may compose Bodies of one and the same Nature and Texture in all Ages: But should they wear away, or break in pieces, the Nature of Things depending on them, would be changed. [I. Newton, *Opticks*, 1952(1730, 4th ed.), New York: Dover, p.400(Book Three. Part I. Quest.31)]

以上のことすべてを考察すると、私には次のことが確からしく思われる。すなわち、初めに神は物質を、固い、充実した、密な、堅い、不可入性の、可動の粒子に形作り、その大きさと形、その他の性質および空間に対する比率を、神がそれらを形作った目的に最もよくかなうようにした。これら始原粒子は固体であるから、それらの複合物であるいかなる多孔質の物質よりも比較できないほど堅く、決して摩滅したり、粉々に壊れたりしないほどきわめて堅い。神自らが最初の創造において、一つに作られたものを、普通で分割することは不可能である。これらの粒子が壊れず完全であるかぎり、それらは万世を通じて同じ性質と構造をもつ物質を構成することができる。しかし、もしそれらが摩滅したり、粉々になつたりすると、それらに依存している事物の性質は変わるであろう。[ニュートン／島尾永康訳『光学』, 岩波文庫, p.352.(1721. 3rd ed.)]

ここで、ニュートンが、「神」が最初の創造において、物質を「堅い固体粒子」として創造した、と述べるのは、その創造によって、現に観察されるような太陽系のシステムが可能になっていることを指摘するだけでなく、むしろ、それが「創造主」である「神」の意図であることを認めているからであると言えることができるであろう。別の言い方をすれば、いわゆる「自然の斉一性 (Uniformity)」を確保するために、「神」は、物質を「堅い固体粒子」として創造したのであるが、「自然の斉一性」を確保することが「創造主」の意図するところであった、ということである。このことは、次の箇所でも、一層明らかである。

Now by the help of these Principles, all material Things seem to have been composed of the hard and solid Particles above-mention'd, variously associated in the first Creation by the Counsel of an intelligent Agent. For it became him who created them to set them in order. And if he did so, it's unphilosophical to seek for any other Origin of the World, or to pretend that it might arise out of a Chaos by the mere Laws of Nature; though being once form'd, it may continue by those Laws for many Ages. For while Comets move in very excentrick Orbs in all manner of Positions, blind Fate could never make all the Planets move one and the the same way in Orbs concentrick, some inconsiderable Irregularities excepted, which may have risen from the mutual Actions of Comets and Planets upon one another, and which will be apt to increase, till this System wants a Reformation. Such a wonderful Uniformity in the

Planetary System must be allowed the Effect of Choice. And so must the Uniformity in the Bodies of Animals.[I.Newton, *Opticks*, 1952(1730, 4th ed.), New York: Dover, p.402(Book Three. Part I. Quest.31)]

さてこれらの原理の助けによって、すべての有形の事物は、上述の堅い固体粒子からなり、最初の創造において、聡明な能動者の意図によって、さまざまに結合されたように思われる。有形の事物に秩序を与えることは、それらを創造した者にふさわしいからである。そして、もしそれが神の御業であるならば、世界の起原を他に求めること、つまり、世界はたんなる自然法則によって渾沌から生じたであろうなどと主張することは、非哲学的である。もともと、ひとたび形成されると、世界は自然法則によって多くの年代にわたって持続することができるのであるが、なぜなら、彗星があらゆる位置をきわめて偏心的な軌道で動くのに対して、すべての惑星を、あるわずかな不規則性をのぞいて、同心的な軌道上を同じ方向に運行させることは、盲目的な運命のよくなるところではないからである。その不規則性は彗星と惑星の相互作用から生じたのであろうが、増加する傾向にあるので、ついにはこの体系は改革を必要とするようになる。惑星体系のこのような驚くべき斉一性は、選択の結果であると認めなければならない。動物の体躯の斉一性も同じである。[ニュートン／島尾永康訳『光学』、岩波文庫、p.354.(1721. 3rd ed.)]

Whitehead は、すでに、『過程と実在』の中でも、彼の有機体の哲学の観点から、ニュートンを評して、次のように言っていた。

Those realists, who base themselves upon the notion of substance, do not get away from the notion of actual entities which move and change. From the point of view of the philosophy of organism, there is great merit in Newton's immovable receptacles. But for Newton they are eternal. [A.N.Whitehead, *Process and Reality*, Corrected Edition, 1978, pp.81-82.]

実体の概念にみずから基礎を置く実在論者たちは、運動し変化する現実的存在の概念から逃げ出しはしない。有機体の哲学の観点からすれば、ニュートンの不動の受容者 *immovable receptacles* には大きな長所がある。しかしニュートンにとっては、それらは永遠である。[平林康之訳、『過程と実在、コスモロジーへの試論』1, p.121.]

この言及は、実在の空間化あるいは空間的な把握に対して、ベルクソンが反対の立場を取ることの指摘をするに際して、述べられている箇所であるが、ニュートンの立場に対する指

摘としては正鵠を射ていると言えるであろう。ニュートンの記述そのものに戻るならば、「自然の法則」を賦課する「神」について、自然哲学の立場から、次のように述べていることが、ニュートン自身の立場を明らかに示していると言えるであろう。

In this third Book I have only begun the Analysis of what remains to be discover'd about Light and its Effects upon the Frame of Nature, hinting several things about it, and leaving the Hints to be examin'd and improv'd by the farther Experiments and Observations of such as are inquisitive. And if natural Philosophy in all its Parts, by pursuing this Method, shall at length be perfected, the Bounds of Moral Philosophy will be also enlarged. For so far as we can know by natural Philosophy what is the first Cause, what Power he has over us, and what Benefits we receive from him, so far our Duty towards him, as well as that towards one another, will appear to us by the Light of Nature. And no doubt, if the Worship of false Gods had not blinded the Heathen, their moral Philosophy would have gone farther than to the four Cardinal Virtues; and instead of teaching the Transmigration of Souls, and to worship the Sun and Moon, and dead Heroes, they would have taught us to worship our true Author and Benefactor, as their Ancestors did under the Government of Noah and his Sons before they corrupted themselves. [I.Newton, *Opticks*, 1952(1730, 4th ed.), New York: Dover, pp.405-6(Book Three. Part I. Quest.31)]

この第 III 篇では、私は光とそれが自然の機構に及ぼす効果について、未発見でのこっている事柄の分析を始めたばかりであり、それについて若干の事柄を暗示したが、その暗示を検討し改良することは、探究心の旺盛な人々の今後の実験と観測に委ねたい。そしてもし自然哲学がその全分野でこの方法を追求して、ついには完成されるならば、道徳哲学の領域もまた拡大されるであろう。なぜなら、われわれが自然哲学によって、第一原因とは何か、神はわれわれに対してどのような支配力をもっているか、またどのような恩恵をわれわれは神から受けているかを知りうるかぎり、それだけ、われわれ相互に対する義務のみならず、われわれの神への義務もまた自然の光によって明らかとなるであろうからである。もし邪神の崇拜が異教徒を盲目にできなかったならば、疑いもなく、かれらの道徳哲学は四元徳以上に進んだであろう。靈魂の輪廻を教え、太陽と月の、そして死せる英雄の崇拜を教える代わりに、かれらはわれわれに、かれらの祖先たちがその墮落以前に、ノアとその息子たちの統治のもとにおこなったように、

われわれの真の造り主であり、恩恵者であるものを崇拜することを教えたであろう。[ニュートン／島尾永康訳『光学』、岩波文庫、p.357.(1721. 3rd ed.)]

A.N. ホワトヘッド／平林康之訳、『実在と過程、コスモロジーへの試論』1, 2, みすず書房, 1983年.

(あかい きよあき, 広島大学 [哲学])

以上、見てきたような、「自然の法則」を賦課する「神」あるいは「超越的存在」を前提する、あるいは、要請する、ニュートンの自然哲学は、「理神論」に基づくことを典型的にあらわしていると言えるであろう。ニュートンのこの「疑問31」の最後の部分に、自らにとっては、「未発見でのこっている事柄の分析を」「探究心の旺盛な人々の今後の実験と観測に委ね」る旨が述べられている。しかし、このことが可能であるのは、まさに、「超越的存在」である「神」が「自然の法則」を賦課したからであって、ある意味で、「自然」についての単純化された考え、換言すれば、「自然の斉一性」という考えがもたらされたことによって、あたかも、「自然の法則」は厳密に遵守され、従って、それを探究する、ニュートンにとっての自然哲学、あるいは、自然科学が可能になると考えられるのであり、ガリレオ、デカルトらとともに、ニュートン自身も、その学説の細部において、差異はあっても、それぞれの自然科学的探究に従事することができたと言えるであろう。他方、「自然の法則」を賦課する「神」あるいは「超越的存在」を前提しない「内在説」だけでは、「自然の法則」が、何故、維持されるのか、説明が困難である理由と、「内在説」と「賦課説」の間でゆれ動く、古代の哲学者たちの問題（プラトンとアリストテレス、エピクロスとルクレティウス）と、さらに、「記述説」（あるいは「実証主義」と「規約説」を経て、なお、「神」について語らざるを得なかった『過程と実在』のWhiteheadについて見ることを次の課題として、ひとまず、この稿を終えることにする。（未完）

文献

Newton, I., *Opticks*, 1952(1730, 4th ed.), New York: Dover.

ニュートン／島尾永康訳『光学』、岩波文庫、1983年.

Whitehead, A.N., 1967(1933). *Adventures of Ideas*, New York: Free Press.

ホワトヘッド／種山恭子訳『観念の冒険』（『ラッセル、ウイトゲンシュタイン、ホワイトヘッド』世界の名著70, 中央公論社, 1980年）所収.

Whitehead, A.N., 1978. *Process and Reality*, Corrected Edition. Edited by David Ray Griffin and Donald W. Sherburne, New York.